

第三講 『伊勢物語』

次の文章を読み、後の問い（問一～問四）に答えよ。

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でて遊びけるを、

大人になり^①にければ、をとこも女も恥ぢかはしてありけれど、をとこはこ

の女をこそ得めと思ふ。女はこのをとこをと思ひつつ、親^③のあはずれども、

聞か^④でなむありける。さてこの隣のをとこのもとよりかくなむ。

筒井^{つつみ}つの井筒^{みづつ}にかけしまろがたけ過ぎ^Aにけらしな妹^B見ざるまに

女、返し、

くらべこし振分髪も肩すぎぬ君^Cならずして誰かあぐべき

などいひいひて、つひに本意^⑥のごとくあひにけり。

さて、年ごろ経るほどに、女、親^⑦なくたよりなくなるまに、もろとも^⑧

にいふかひなくてあらむやはとて、かふちの国、高安^{たかやす}の郡^{こほり}に、いきかよふ

所出^⑨できにけり。さりけれ^ア、このもとの女、悪しと思へるけしきも

なくて、出だしやりけれ^イ、をとこ、異心ありてかかるに^ウあら

むと思ひうたがひて、前裁の中にかくれみて、かふちへいぬる顔^⑩にて見れ

ば、この女、いとよう仮粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つ白波たつた山^D夜半^{よは}にや君がひとりこゆらむ

とよみけるをききて、限り^⑩なくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。^E

問一 文中の空白部 ア ウ を補うのに適当な助詞をア～コの中から選べ。

アの イに ウば エは オて
カド キを クが ケや コも

ア
イ
ウ

問二 文中の傍線部①～⑩の語句の解釈として、それぞれ最も適するものを、各選択肢ア～オの中から選べ。

①「大人になりにつれば」

ア 大人ではないので
ウ 大人になれないので
オ 大人になっても
イ 大人になったなら
エ 大人になったので

②「恥ぢかはしてありけれど」

ア 恥ぢかしかつたとしても
ウ はにかみあっていたけれど
オ 恥ぢべきことではなかったが
イ はにかみあっていたので
エ 恥ぢかしかつたので

③「親のあはすれども」

ア 親同士はよく会ったのだが
ウ 親は二人を逢わせたのだが
オ 親は結婚させようとしたが
イ 親は再婚したのだが
エ 親同士は意見一致したのだが

④「聞かでなむありける」

ア 耳をかそうとしなかった
ウ 聞きたくもなかった
オ 聞こえなかったであった
イ 従うつもりはなかった
エ 聞かないままになってしまった

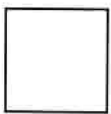
⑤ 「をとこのもとよりかくなむ」

ア 男は初めからそうだった
イ 男のところからこう言ってきた
ウ 男のほうからそう言ってほしかった
エ 男はもちろんそうしたかった
オ 男というものは元来そうしたものなのだ



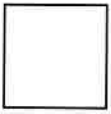
⑥ 「本意のごとくあひにけり」

ア 本心であるかのようにみせて会った
イ 本心は別のところにあったのだが
ウ 本心をかくしてお見合いをした
エ 願っていたとおりに事はこんだ
オ 思いどおりに結婚したのだった



⑦ 「たよりなくなるままに」

ア 文通がとだえてしまったので
イ 頼りがいのない人になってしまったので
ウ 生活のよりどころがなくなったので
エ 頼ろうとは思わなくなったので
オ 文通がなくなるのにつれて



⑧ 「もろともにいふかひなくてあらむやは」

ア お互いの言い分がないわけではないが
イ この女のためにこんなみじめな思いをするのは嫌だ
ウ お互いに相手のみすぼらしさに嫌気がさして
エ お互いにこんなみすぼらしい状態でいられようか
オ お互いにこのままでは駄目になってしまうだろうか



⑨「かふちへいぬる顔にて」

- ア 河内へ行こうと嬉しそうな顔をして
- イ 河内へ出かけたふりをして
- ウ 河内へ行ってきたような顔をして
- エ 河内へは行かないようなふりをしたので
- オ 河内へ行ってしまおうと決心して

⑩「限りなくかなしと思ひて」

- ア この上なくいとしく思つて
- イ とめどもなく悲しみにみちて
- ウ なんともはかないものだと思つて
- エ どうみても良くないと反省して
- オ 際限なく我が身をせめて

問三

文中の傍線部A～Dの語句の解釈として、それぞれ最も適するものを、各選択肢ア～オの中から選べ。

A 「まろがたけ過ぎにけらしな」

- ア わたしの背丈は大きくなったでしょうね
- イ 幼いころの日はすぎてしまったのでしょうか
- ウ 背くらべした日は遠い昔になったね
- エ お前の背丈より大きくなったと思うが
- オ わたしの背丈を超えただろうか

B 「妹見ざるまに」

- ア おまえが見ない間に
- イ おまえを見なかったので
- ウ おまえを知らなかった間に
- エ おまえを見ない間に
- オ おまえが見ないように

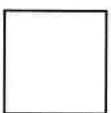
C「君ならずして誰かあぐべき」

- ア あなたにでなくて誰にささげましょうか
- イ あなたでなくても他の誰かが結い上げてくれるでしょう
- ウ あなたがいない以上、誰に結い上げてもらえればいいのでしょうか
- エ あなたにはなくて他の誰かにささげねばなりません
- オ あなたにでなくて他の誰のために、結い上げるというのでしょうか



D「夜半にや君がひとりこゆらむ」

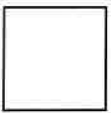
- ア 真夜中なので人目につかず越えていけるでしょう
- イ 真夜中というのにたった一人で越えていくのでしょうか
- ウ 真夜中になっても一人で行くとおっしゃるのですか
- エ 真夜中でもたった一人なら越えていくことができますよ
- オ 真夜中になったら一人では越えていられないでしょう



問四

文中の傍線部E「いかずなりにけり」の「ず」――「に」――「けり」の文法的説明として、最も適するものを、選択肢ア～カの中から選べ。

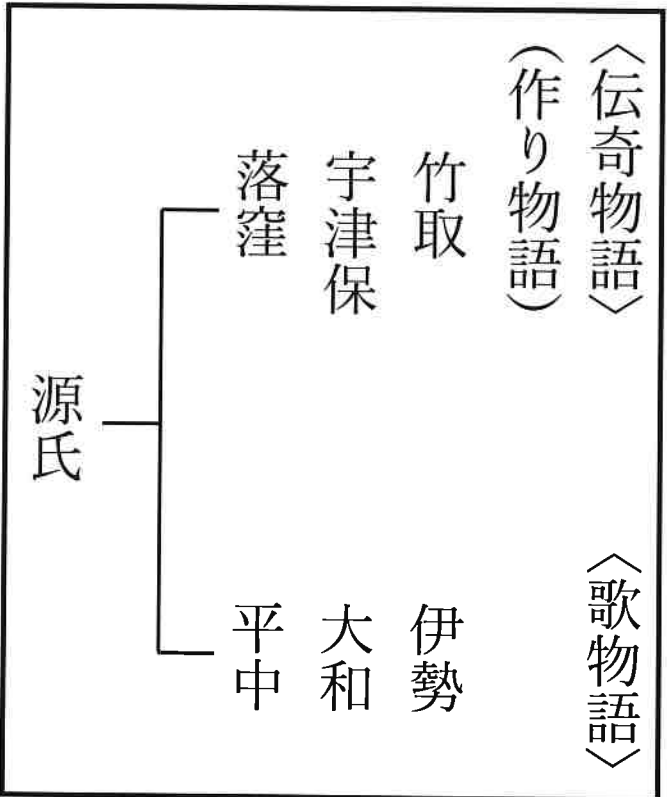
- ア 打消の助動詞「ず」の未然形――係助詞「に」
――過去の助動詞「けり」の已然形
- イ 打消の助動詞「ず」の未然形――完了の助動詞「ぬ」の終止形
――詠嘆の助動詞「けり」の終止形
- ウ 打消の助動詞「ず」の連用形――完了の助動詞「ぬ」の連用形
――過去の助動詞「けり」の終止形
- エ 打消の助動詞「ず」の連用形――格助詞「に」
――過去の助動詞「けり」の終止形
- オ 打消の助動詞「ず」の終止形――完了の助動詞「ぬ」の連用形
――過去の助動詞「けり」の已然形
- カ 打消の助動詞「ず」の終止形――格助詞「に」
――完了の助動詞「けり」の已然形



第三講

『伊勢物語』

- ・ 別名 『在五中将日記』
ざいごちゆうじょう
- ・ 主人公 在原業平
ありわらのなりひら
- ・ 「みやび」の文学



連用十つつ (接助)
くテハ・くナガラ

《おい、ちよつと早すぎないか成人式》

元服について。皇族・貴族の男女の成人式。

男子の成人式げんぶく 元服・初冠うひかうぶり（現代仮名遣いは、ういこうぶり）——元服するとはじめて冠をつける。
だいたい十一歳から十五歳。



女子の成人式もぎ 裳着——はじめて裳を着る。だいたい十二歳から十四歳。そして成人式の時「髪上げ」といって髪を後ろで束ねて下げ髪（おかつぱ）を大人の髪型に改める。

※男女とも十二歳（今でいう小六）前後と考えてくれればいい。元服直後に結婚することが多い。光源氏は十二歳で元服し、元服の日に、左大臣の娘、葵上（十五歳）と結婚し、左大臣家の婿むことして迎えられた。

よばふ【呼ばふ】

① 求婚する

② 呼び続ける

あふ【合ふ・会ふ・逢ふ】

結婚する

cf. あはす【合はす】

結婚させる・夫婦になる

やる（こちらから向こうへやる）

① 送る・届ける・遣わす

② 心をはらす

おこす（向こうから来る）

よこす・届けてくる

かな

かも

な

詠嘆の終助

くダナア

いも **【妹】**

男が女(妻・恋人)を親しみをこめていう語
↓(いとしい)あなた

せ **【背】**

女が男(夫・兄・弟)を親しみをこめていう
語↓(いとしい)あなた・あの人

ほい **【本意】**

本来の意志(志)・本来の目的・
かねてからの願い

ほいなし **【本意無し】**

- ① 残念である
- ② 不本意である・気にいらぬ

としごろ 【年頃・年来・年比】

① 長年

② 数年来

cf. ひごろ 【日頃】

① 数日（の間）

② ふだん・いつも

たより 【便り】

① よりどころ

② 機会・ついで

③ 縁・ゆかり・関係

④ 配置

cf. たづき 【方便】

手段・手がかり・方法

そのままに

① 〓につれて

② 〓とすぐに

③ 〓ので

④ 〓にまかせて

⑤ 〓と同時に

あぢきなし

あへなし

いふかひなし 【言ふ甲斐なし】

よしなし

わりなし

どうしようもない

cf. かひなし・せむかたなし・

やるかたなし・すべなし 【術なし】
ずちなし 【術なし】

やは

かは

反語（ごくたまに疑問のときもある）

こと

【異】 ↓ 違う・格別

【事】 ↓ 前後から意味を判断する

【言】 ↓ 言葉・和歌・漢詩

【殊】 ↓ 格別に・特に（「殊に」（副詞））

《結婚してくれてありがとう、でも俺はお前の家の経済力と結婚したんだ》

当時、男性は、女性の経済力と結婚する。当然女性は働いていないから、女性の親が裕福かどうか。だから、女の親が亡くなり、男は経済的援助をしてもらえなくなったために、他に女を作り出て行くパターンは結構多い。特に男(婿)の衣服の世話は、女(妻)の家の義務となつて

《俺、おまえのこと好きだけど、おまえだけってわけにはいかないんだ》

平安時代、結婚を表す語には、よばふ(求婚する)、合ふ・会ふ・逢ふ(男と女が契りを結ぶ。または結婚する)、通ふ(男が女のところに通う。通うとあつたら、主語は 男。待つのは女)、住む(結婚して、一緒に生活をする)などがある。

平安時代の結婚形態は、男性貴族は同時に二人以上の妻を持つことができるいっぶたさいせい一夫多妻制で、男が女のところに通う妻問婚つまどいこん(通い婚ともいう)。藤原道長のお父さん兼家には、正妻、時姫ときひめのほか七人もの女性(妻)がいたといわれている。その女性の一人に『蜻蛉日記』の作者、藤原道綱母わたらのみちつなのははがいる。

女に自由はない、女は待つ身の妻問婚。といってもやっぱり女は大嫉妬はするわけよ。だって夫に七人の女性がいれば、単純計算したって一週間に一回しか自分のところに来ないわけじゃん。十人、妻がいればいつ来るかわからない。「たまに私のところに来れば十分です。私はいつでもあなたのお越しをお待ちしております。」なんて女はいないの。今と同じだよ。

ながむ

【眺む】 ぼんやりともの思いにふける

【詠む】 詩歌を吟じる Ⅱ 和歌を詠む・

(和歌・漢詩を) 口ずさむ

立 (龍・竜) 田山

たつ

立つ

かぎりなし 【限り無し】

この上ない

うつくし 【美し】

かなし 【愛し】

らうたし 【労甚し】

かわいい・かわいらしい

cf.

あいぎやう 【愛敬】

① かわいさ・かわいらしさ

② やさしさ

本文通釈

昔、田舎を回って行商をしていた人の子どもたちが（まあ、もつと簡単に言ってしまうえば、田舎で生活している人と理解できればいい）、井戸のそばに出て遊んでいたが、（その男の子と女の子は）大人になったので、男も女もお互いに恥ずかしがりあっていたけれども、「男はこの女をどうしても（または、ぜひ）妻にしたい」と思う。「女はこの男を（夫にしたい）と思いつながら（年月を過ごしてきたが）、親が（他の人と）結婚させようとするけれども（または、しても）、（女は）聞かないでいた（わかるか？ 聞き入れようとしてもしなかつたわけだ）。そうこうしているうちに隣の男のもとからこのように（歌を詠んでよこした）。

（幼いころ）あの筒井の井筒（授業でも言ったけど、この辺は何となくわかればいいよ。ようするに丸く堀りあげた井戸の井戸わく）と背比べをした私の背丈は、もう（井戸わく）を越えてしまったようだなあ（ちょっと意識して、ようだよ）。あなたと会わないでいるうちに（俺もすっかり大人になったぜ！）

女、返し

（あなたとどっちが長いかと）比べあってきた私の振り分け髪も、もう肩を越すほどに長くなつてしまいました。（私も成人したしるしに今まで垂らしていた髪を結い上げねばなりません、夫と決めた）あなたのためでなくて誰のために髪上げをしましょうか、いやあなたしかいません。

などと互いに言い交わして、とうとうかねてからの望みどおり結婚したのだった。

こうして、数年が過ぎるうちに、女は親が死んで生活のよりどころがなくなるので（ようするに、暮らしむきがおぼつかなくなったので）、（次は男の心中）「夫婦ともにどうしようもない状態（＝暮らし）でいられようか、いやいられない」と思って、河内の国、高安の郡に通っていく女のところができてしまった（たぶんこの女は裕福なんだよ）、そうなたけれど、このもとの女は、（その男の行動を）「不快だ（または、憎い）」と思つている様子もなくて、（男を）送り出してやったので、男は（妻には）「浮気心があつて（＝他に思う男があつて）このように（私を快く送り出している）のではないだろうか」と思い疑つて、（ある日）庭の植え込みの中に隠れて座つて、河内へ出かけていくふりをして見ていると、この女（＝もとの妻）はたいそう美しく化粧して、ぼんやりと物思いにふけて、

風が吹くと沖の白い波が立つ（盗賊が出る）という立田山（龍田山でもいいよ）をこの夜中にあなたは一人で越えているのであろうか（どうぞご無事でありますように）

と詠んだのを聞いて、（男は、もとの妻を）「この上なくいい」と思つて、河内（の女のところ）へも通つて行かなくなった。